

第23回アジア政経学会優秀論文賞選考理由

優秀論文選考委員会委員長 中溝和弥

授賞作：和田知樹「中国国民党政権における『以党治国』の逸脱—第4次『囲剿』作戦期の党政関係を中心として」『アジア研究』第71巻1-2号、20—37頁。

本論文は、中国国民党政権の統治について、囲剿区の統治に注目して先行研究の課題を克服し、戦後の国民党統治をも見通す新たな知見を描き出すことに成功している。すなわち、先行研究は、国民党の統治原則である「以党治国」が実態としては未徹底で訓政も形骸化していたことや、政権が状況に応じた柔軟な運用を行っていたこと、さらに囲剿区の統治が統治体制変革の重要な動因であったことなどをそれぞれ指摘してきた。しかし、全国的な体制運用に着目する研究が囲剿区の実践を考慮してこなかった一方で、囲剿区に着目した研究もまた、その局地的な分析に留まり国政レベルとの関連を視野に入れていないという課題があった。これに対し和田氏は、これら双方の先行研究の課題を架橋すべく、囲剿区の統治が国民党政権の統治体制全体の在り方や理念などに与えた影響については十分に論じられていないとして、「囲剿区における党政関係の再編に着目し、訓政期の国民党政権の体制運用システムのあり方を再検討」することを提唱した。

本論文が注目するのは、中央と地方の関わりが生み出した相互作用である。この観点から、これまで十分に注目されてこなかった第4次囲剿作戦が鍵となるとし、同作戦によって権限が強化された党政委員会が政治権力の一元化を生み出し、これが後に中央における「以党治国」の換骨奪胎を生み出していったとの仮説を立てた。

仮説を検証した結果、以下のことが明らかになった。まず第4次囲剿作戦期においてすでに、国民党政権が「以党治国」とは異なる政治指導体制を構築し、その運用を通じて囲剿作戦に関わる各省に対して政治的、行政的影響力を行使しえたこと。次に、国民党政権の政治体制における地方統治の脆弱性という課題が、（複数の）中央と地方との関係が複層的なものへと変化していたことなどを踏まえ、囲剿作戦期には改善されつつあったこと、である。

これらの変容は、まさに「以党治国」の枠組み内で、囲剿作戦という現実に対処した結果でもあったが、事実上は「以党治国」の換骨奪胎にほかならなかったと本論文は主張する。すなわち囲剿作戦期に局所的に生じた統治組織の再編とは、国民党による統治—「党治」—を前提としない統治体制の模索であり、同時にそれは北伐後の政治情勢への適応の結果でもあった、というのが本論文の結論である。

仮説の検証手法も、檔案史料や雑誌などを用い、適切に統計などを用いながら説得的に展開している。分析がときとして細部に至るため、やや難解な点があることは否めないが、詳細な歴史的事実を仮説に沿って論理的に構成する力量は高く評価できる。さらに、後の台湾における国民党政権の権威主義を説明する含意も持ち、細部を議論しつつもその射程は広く、将来性に富んでいる。

以上の理由により、選考委員一同は、本論文の学術的価値を高く評価し、さらなる飛躍を遂げる可能性に大いに期待した。よって、第23回アジア政経学会優秀論文賞にふさわしいと判断した。

受賞の辞

和田知樹

この度は第23回アジア政経学会優秀論文賞を頂戴し、大変光栄に存じます。選考委員会の先生方および編集委員会の先生方、そして拙論文に対して重要な意見をくださった匿名の査読者の先生方に、まずは深く御礼を申し上げます。

この度の論文は、私の修士論文の内容をベースに、内容を書き改めたものになります。博士課程に進学したばかりの2024年5月に、初めての論文として投稿したものがこの論文です。北海道大学の修士課程および博士課程の指導教員である岩谷将先生には、独特のユーモアも交えつつ、懇切丁寧なご指導を頂いております。本論文も投稿前に何度も目を通して頂き、私の方でも修正するたびに内容がよくなっていることを実感することができました。この場を借りて感謝を述べさせて頂きたいと思います。また、査読対応・校正・出版のプロセスを体験することにより、論文を世に出すことがこれだけ多くの人々の協力のもとに成り立っているのだと実感することが出来ました。

さて、今回の論文は処女作であると同時に、執筆・投稿から約二年が経過した今では、問題意識の作でもあったと考えております。1949年に中国大陆の支配者としての座を譲った中国国民党については、すでに既存の膨大な研究があります。しかし、近年台湾と中国大陆において政治情勢が異なり、中台の分断が固定化される中、1949年以前の国民党は次第に研究テーマとしての真新しさを失っていきました。修士課程在学中にはすでにその傾向は明らかとなっておりましたが、その一方で近年急速に公開されている蒋介石や国民党関連者の史料をどのように存分に活用するのかという別の課題も生じているように思います。ある国民党の重鎮は戦後に至り、「歴史の記憶を灰にして消え去ることを許しはしない」（不容青史盡成灰）と述べましたが、現在はまさにその転換点にあるのだと思います。

その意味で、従来の研究では軍管区として把握されてきた特殊地域に着目し、日中戦争以前の国民党の政治体制を再検討するという本論文のテーマは、現在の史料状況と、過去の研究の蓄積をなくしては実現できなかったはずです。自分の研究はまだまだ駆け出しではありますが、中国政治史、ひいては比較政治などの隣接する領域においても参照頂くことができれば、これ以上の喜びはないと思います。

今後の研究においても、中国政治史の切り口から、中国における政治や社会の特質に迫っていきたいと考えております。今回の受賞は、今後も研鑽を続けていくことで学界、ひいては社会に恩返ししたい所存でございます。ご清聴頂きありがとうございました。